

## 原著論文

## 初等教育学科「音楽」におけるピアノ指導の現状と課題 その2

An On-Going Study on Group Piano Instruction in Class  
for College Students in Early Childhood Education Major:  
Its Current Situations and Issues on the 2nd Year川口 潤子 (白百合女子大学)  
Kawaguchi Junko (Shirayuri University)

本稿は、昨年度(2016年度)4月に開設した本学初等教育学科の「音楽」授業におけるピアノ指導に関する、学科開設当初からの継続研究である。前研究「初等教育学科『音楽』におけるピアノ指導の現状と課題」で見出された改善案に基づき、今年度実践した試みを評価し、さらなる課題と対応について検討する。

今年度(2017年度)は「入学前課題の配布と指導」「経験者向け特別クラスの新設」を初めて実施した。授業内の自習を促す工夫として、これまでの「3色個人カルテ」に加えて「メニューおまかせ10回練習」「弾き歌い評価シート」を新たに導入した。さらに伴奏法として、「転回形を交えない基本形和音のみによる伴奏へ」という根本的転換を検討した。これらに関しては授業中の学生の習熟状況の確認に加え、必要に応じてアンケート調査をおこない、学生の本音の汲み取りも心がけた。今後の課題としては、上記各項目のさらなる改善、および「弾き歌いを子どもたちの活動と結びつけて考えることのできる音楽教材の作成」「読譜アプリの活用」などが見出された。

## はじめに

本学初等教育学科のカリキュラムには、ピアノ実技のみを学習する必修科目は設置されておらず、4年間を通して15回の必修「音楽」の中で、小学校・幼稚園における基本的な音楽の教育内容と共に、弾き歌いを学習することになっている。この限られた時間のなかで、いかに子どもたちの表現を支えるピアノ技能を身に付けさせるかが大きな課題である。

昨年度おこなった前研究では、まず、本学初等教育学科ピアノ指導の学習環境と学習内容、指導方法の概要を振り返った。そして、学生の意識調査の結果から、筆者の集団指導では経験者よりも初心者において、効果と満足度が顕著であることが明らかになった。また、今後の対応として、初心者への入学前教育の実施、経験者向け特別クラスの設置、他科目との連携など、具体的な提案をおこなった。

本研究はこれを受け、授業改善に向けて行った2017年度の実践内容を報告・評価し、さらなる今後の方向性を見出そうとするものである。

前研究では、ピアノ経験者と初心者がクラスに混在していたため、経験差の問題が生じていた。それに対応して今年度の本研究では、入学前課題配布やピアノ初心者に向けた入学前指導を実施、入学後にはピアノ経験者のための特別クラスを設置することにより改善を図ろうとした。クラス内での経験差を示す「3色個人カルテ」は引き続き使用した。

さらに、限られた授業時間と集団設定ゆえに個別対応に限界があることから、学生が指導者から離れても自習しやすい方法を考える必要があると考えた。そこで転回形を交えずに「基本形に統一したコード伴奏」を採

択し、自己評価が可能な「弾き歌い評価シート」を活用した。

## 授業の概要

対象：2017年度 初等教育学科1年生

前期、水曜1限「音楽」受講生20名 金曜3限「音楽」受講生22名

後期、水曜1限「音楽」受講生19名 金曜3限「音楽」受講生15名

※実際には各クラスに再履修生や他学科上級生が1～4名加わった人数で授業が行われた。

## 1 学生の「ピアノ経験格差」への対応

### —入学前の課題配布と指導，経験者向け特別クラスの新設

#### 1-1 「入学前ピアノ課題」の配布（新規実施）

ピアノ未経験者に対して授業内ピアノ指導期間の短さを補うために、入学前に自習や予習ができる「入学前ピアノ課題」のリーフレットを作成し、合格した全ての学生に郵送配布した。

入学前ピアノ課題は、「かえるの合唱」「ちょうちょう」「ぶんぶんぶん」「ロンドン橋」「メリーさんのひつじ」の5曲である。左手コードは、Cコード（ドミソ）とGコード（ソシレ）の2種類のみ。

まずCコードだけで弾くことができる「かえるの合唱」を使って、左手の3つのパターン「3音を同時に弾く方法」「根音と他の2音を交互に弾く方法」「アルベルティバス」を練習した。

次にGコードも加わった他の曲が練習できるように配列した。手の位置が移動する箇所には、指番号を書き入れた。また、読譜カードによる読譜の練習、英語音名・指番号の暗記を促す文章を記した。

#### 1-2 希望者への入学前レッスン（新規実施）

初めてピアノに触れる新入生に配慮し、配布済みの「入学前ピアノ課題」のレッスンを希望者に対して学内にて2回実施した。日時は、3月4日（土）と3月18日（土）、いずれも10時～12時。事前にメールで申し込みを受け、アシスタント1名と共に集団指導を行った。受講者は1回目が6人、2回目が31人。新入生（76名）全体の49%にあたる37人が受講した。「入学前ピアノ課題」が本人に届く時期が、入学試験の種類によって2月上旬～3月中旬に及んだため、自宅である程度練習してから参加した学生と、何も準備せずにとりあえず参加した学生がみられた。

#### 1-3 入学後確認テストの実施（新規実施）

上記「入学前ピアノ課題」について、前期「音楽」受講生には、授業開始後2回目の授業で、後期「音楽」受講生には、5月連休後の昼休みに、確認テストを行った。課題は、「入学前ピアノ課題」の5曲で、ランダムにその場で指定されものを2曲弾いた。評価基準は、「最後まで止まらずに弾ける」「子どもが歌いやすい速さで弾ける」「歌いながら弾ける」の3項目とし、3項目ができていれば合格とした。

後日実施した「入学前ピアノ課題」についてのアンケート調査では、「入学前ピアノ課題はあったほうがよいか」の質問に対して「あった方がよい」と回答した学生は、新入生全体（76名）の97%（74名）であった。アンケートには、下記の自由記述があった。

- 入学後のピアノの難易度がだいたい読めてよかった。
- 初心者でも練習すればなんとか弾けるレベルだった。
- 鍵盤と指の絵があったらよかった。
- 楽譜の左手部分を途中で空白にせず、全部の音を書いてほしい。
- 左手が全部書いてある方がやる気がでる。
- 初めにテストがあると書いてあれば、もっと練習したと思う。

- 入学後にテストがあると書かれていると良い。

入学前ピアノ課題の大譜表に書かれた左手伴奏が部分的に省略されていたことについては、不評であった。部分的に左手の音を書かず、コードによって左手の音を埋めて弾くように指示してあったのだが、その部分だけ左手伴奏が無い曲のように見えてしまうことに違和感を感じたようだ。新入生に抵抗なく弾いてもらうため、少なくとも入学前ピアノ課題においては、左手の音を記入し、弾きたい気持ちになれる楽譜にすることが大切だと感じた。

また、学生たちは、入学後の確認テストを、練習のモチベーションを上げるものとして前向きに捉えており、前もってテストの有無をはっきり示されることを望んでいることがわかった。

複数回再テストが必要であった学生を含め、5月中に全員が入学前課題を終えた。

#### 1-4 「経験者向け特別クラス」の設置（新規実施）

ピアノの演奏経験が長く、自分で楽譜を読み、自習できると思われる学生のために、「経験者向け特別クラス」（幼児教育コース・児童教育コース混合）を設置した。これは、前期2クラス・後期2クラス、合計4クラスのうちの前期1クラスである。

今回の研究の学生選抜は「音楽経験アンケート」の回答のみを基準とした。

アンケート用紙には、「経験年数とその時期」「今までで一番良く弾けていた頃の曲目（複数）」を記入する欄を設け、「入学前ピアノ課題」と共に郵送配布、入学式直後に回収、「音楽経験アンケート」に記入された経験年数と過去に弾いた曲目を参考に、履修科目登録日までに特別クラスの学生22名を選抜した。

この特別クラスでは、ピアノ技能指導を短縮し、ピアノ技能以外の教科内容に焦点を当てる授業計画を立てた。しかし選抜はうまくいかず、初心者クラスに入ってゆとりをもって楽しく学んだ方がよかったと思われる学生が3名ほど混在していた。その3名は、いずれもピアノ経験6年以上の学生であったが、楽譜が読めないまま複数のレパートリーを持っていたり、リズムを読譜によって理解せず、感覚的に弾いていたりした。これらの学生については、昼休みなどを使い、初心者向けの授業の内容を補った。また、他の学生についても予想した以上に指導が必要な学生が多かった。

このように、今年度初めての「経験者向け特別クラス」は、筆者が予想していたものとは異なる展開となった。改めてアンケートの自己申告のみによってピアノ技能を判断することの難しさを感じた。

#### 1-5 3色個人カルテの活用（前研究より継続実施）

クラスで使用する3色に色分けされた個人カルテは、昨年度から継続実施した。さらに今年度は、この個人カルテに、「入学前ピアノ課題アンケート」「音楽経験アンケート」「弾き歌い評価シート」を加えて綴じた。

3色は「経験者」「やや経験者」「初心者」を示しており、集団授業の設定でも、各自がそばにカルテを置くことによって、教員や学生が、誰が初心者であるか経験者であるか、いつでもわかるようになっている。「同じ目標を持つ仲間だから、みんなで協力して学んでいこう」と呼びかけ、カルテの色によって初心者と経験者がペアで座り、初心者が経験者の指を真似たり、教えてもらったりできるようにした。個人カルテは、毎回、授業開始時に配布、終了時に回収した。



図1. 3色個人カルテ

個人カルテを使用することによって、昨年度と同じく、アセスメント内容や確認テストの合否の把握が容易

となり、有効に使用できたと思われる。学生たちは、個人カルテの色分けの意味を理解し、次第に、ペアで練習する際にも自主的に席を移動して初心者同士が座らないように配慮できるようになった。クラス内でカルテが色分けされることに対しての聞き取り調査では、ほとんどの初心者が、「わかってもらえるのでよい」と答え、自分が初心者であることを理解してほしいと考えていることがわかった。

## 2 授業における自習を促す工夫

### －「メニューおまかせ10回練習」「弾き歌い評価シート」

#### 2-1 「自分で決める」反復練習（新規実施）

授業の中で、1つの曲をクラス全員が速さを揃えて一緒に、なおかつ何を繰り返すかは各自が決めて10回の反復練習を行う「メニューおまかせ10回練習」を実施した。これは、例えば、「わたしは、まず右手だけ3回、次に左手だけ3回、最後は両手で4回弾こう」というように、各自が自分で練習メニューを決めて10回繰り返す方法である。

どのようにピアノを練習したらよいかわからない初心者にとっては、反復練習の経験となり、主体的な自習を行うためのトレーニングになったと思われる。

また、この方法は、集団指導における個人差に対応するのにも有効であった。

#### 2-2 弾き歌い評価シートの活用（新規実施）

弾き歌いにおいて求められていることを、学生が明確に理解し自己評価できるよう、また、指導者が公平かつ客観的に評価できるよう、「弾き歌い評価シート」を作成した。

弾き歌い評価シートには、「流れ」「指使い」「リズム」「速さ」「歌」について4段階の評価基準と配点が示されているほか、リハーサル採点表と確認テスト採点表が記されている。評価基準は、誰でも評価できるよう、できるだけシンプルなものにした。

弾き歌い評価シートは、1部は学生が自主練習のために自宅に持ち帰り、3部は3回分の確認テスト用として個人カルテに綴じた。確認テストでは、教員がそのシートに評価を記入した。「弾き歌い評価シート」は、学生に到達すべき目標を明確に示し、確認テストの準備をやりやすくするものだったと思われる。確認テストのリハーサルにおいて学生同士が評価し合った際にもスムーズに活用することができていた。また、教員にとっても、公平かつ客観的な弾き歌い評価が、ある程度可能になったと感じた。

2017年度 弾き歌い評価シート

初等教育学科      コース      学籍番号下2桁(      )      名前      \_\_\_\_\_

項目	点数	評価基準	項目	点数	評価基準
流れ	3	止まらずに弾けた。	速さ	3	歌いやすい速さで弾けた。
	2	1～2回、止まった。		2	少し早(遅)過ぎた。
	1	3～4回、止まった。		1	とても早(遅)過ぎた。
	0	5回以上、止まった。		0	速さがわからない弾き方だった。
指使い	3	適切な指使いで弾けた。	歌	3	心を込めてのびのびと歌えた。
	2	1カ所、不自然だった。		2	もう一息だが、歌えた。
	1	2カ所、不自然だった。		1	明瞭さ、音程などがもう少し。
	0	3カ所以上、不自然だった。		0	歌わなかった。
リズム	3	正しいリズムで弾けた。	※ 1曲15点満点。 ※ <span style="background-color: #cccccc; padding: 2px;">  </span> は、不合格。		
	2	理解しているが乗れていない。			
	1	1カ所、間違っていた。			
	0	2カ所以上、間違っていた。			

リハーサル	月 日 ( ) 時間目				
	流れ	指使い	リズム	速さ	歌
①かたつむり	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0
②山の音楽家	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0
③さんぽ	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0

左手を静かに弾きましょう。       指の形に気を付けましょう。  
 練習量を増やしましょう。       さんに教えてもらいましょう。

確認テスト	月 日 ( ) 時間目				
	流れ	指使い	リズム	速さ	歌
①かたつむり	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0
②山の音楽家	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0
③さんぽ	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0	3 2 1 0

左手を静かに弾きましょう。       指の形に気を付けましょう。  
 練習量を増やしましょう。       さんに教えてもらいましょう。

**合格・不合格**

図2. 弾き歌い評価シート



### 3 伴奏法の根本的な見直しへ

#### 一 「転回形」を含めない「基本形」のみによるコード伴奏法への転換の検討

##### 3-1 「転回形」を交えない「基本形」だけによるコード伴奏の採択（新規実施）

これまでの筆者の指導では、慣習的に、ハ長調のGコードを「シレソ」、Fコードを「ドファラ」とする転回形コードを用いての弾き歌いに取り組んでいた。しかし今年度より、ヘ長調の「山の音楽家」、ト長調の「大きな古時計」、ニ長調の「かたつむり」を学習し始めるタイミングに合わせて、「基本形のみによるコード伴奏」の採択を試みた。なぜなら、新しいそれぞれの調性の転回形を含む3つの基本コード（I・IV・V）や副三和音などを覚えさせることは、学生にとって大きな負担になり、和音に関する初歩的な理論的理解をかえって遅らせると考えたためである。

1990年代以降、「簡易伴奏」「簡易伴奏付き」として出版されてきた弾き歌いの楽譜の多くは、主に属七和音を含む主要三和音（スリーコードのカデンツァによるコード）による伴奏楽譜であった。つまり、ハ長調を例にあげると、Cコードはドミソ、Fコードはドファラ、Gコードはシレソ、G7コードはシファソと弾く方法である。この方法で学習を進めた場合、問題になるのが、ト長調やヘ長調、ニ長調といった調性の曲に出会ったときである。例えば、ハ長調のGコードをシレソ（転回形）と覚えた学生が、ト長調の曲に出会うとする。するとその学生は、楽譜にGコードが出てくるたびに、ハ長調で覚えたシレソの和音を弾き続ける、ということが起こってしまうのである。それはト長調には相応しくないということを伝えるには、理論的な解説が必要で、教員はその説明に大きなエネルギーを注ぐことになる。それを避けようとする、結局、レパートリーを自由に広げることができず、ハ長調の簡単な曲ばかりを弾くことになってしまうのである。

「基本形」だけによるコード伴奏として行った「単音伴奏」「まん中省き奏法<sup>1)</sup>」「オクターブ奏法<sup>2)</sup>」は、ト長調やヘ長調、ニ長調といった曲や副三和音、借用和音を含む曲の履修を容易にした。

##### 3-2 コード伴奏についての学生アンケート

2017年度の学生は、15回の授業の中で、転回形によるコード伴奏と基本形によるコード伴奏の両方を経験したことになる。学生は、どちらのコード伴奏を好むのだろうか。12月に、1年生全員に実施したアンケートの結果は、次のとおりである。

「あなたは、基本形か転回形、どちらのコード伴奏法を好みますか」

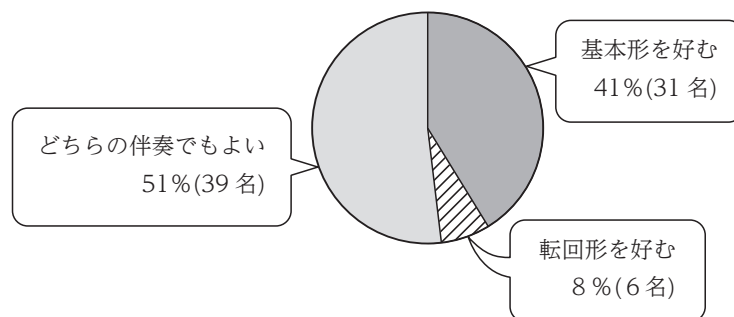


表1. 2017年度初等教育学科1年生(76名)コード伴奏についてのアンケート

〈基本形を好む学生の理由〉

- そのままなので分かりやすい。(16名)
- 指の間隔が同じで弾けるので、弾きやすい。(9名)
- Gを転回形でシレソと弾くと、Gを見たら小指がシと覚えてしまうから(1名)
- きれいだと思うから(1名)
- 無回答(4名)

〈転回形を好む学生の理由〉

- 手の移動が小さいから。(1名)
- 慣れているので弾きやすい(4名)
- 無回答(1名)

基本形のコード伴奏のマイナス要因としては、手の位置を大きく移動しなければならないことがある。しかし、アンケート結果から、ほとんどの学生たちは、手の位置の大きな移動を「難しいこと」とは感じていないことがわかった。むしろ、分かりやすい、弾きやすいという理由で基本形を好むと回答した学生が多かった。シンプルで分かりやすい方法は、学生の主体的な自習を促すことにも繋がると思われる。

初めて基本形コードの根音のみを弾いていく「単音伴奏」を試みた際、右手のメロディーと同音になるときの響きの固さに抵抗を感じて、筆者はなかなか「基本形」のみのコード伴奏法に踏みきれなかった。しかし、保育現場の子どもたちの歌唱活動のねらいは、芸術的に完成度の高い音楽を目指すことではない。大好きな先生と一緒に歌うことを喜んだり、お気に入りの歌を楽しんで繰り返したり、歌を通して様々なものに出会ったりする経験が大切なのであり、弾き歌いのピアノ技能もそのような場面を支えるものであることを忘れてはならないだろう。保育者の負担を軽減し、子どもたちがたくさんの歌に出会い、言葉に出会える伴奏法こそ、現場に相応しい伴奏法といえるのではないだろうか。

## 4 今後の課題と対応

### 4-1 「入学前ピアノ課題」と「音楽経験アンケート」の改善

学生の要望を踏まえて入学前ピアノ課題の楽譜を見やすいものに修正するとともに、後日確認テストがあることがわかる文章を加える予定である。

音楽経験アンケートについては、具体的な譜例をあげて質問するなど、アンケート内容の見直しを図り、個人のピアノ技能がより正確に把握できるようにしたいと考えている。

### 4-2 基本形コードから始める学習への変更

次年度からは、集団学習による限られた授業時間内に効率的にレパートリーを増やせるよう、初心者に対して基本形コードによるコード伴奏を進めていきたい。

ただし、先に述べた4クラスの内、後期の児童教育コースの学生が取り組む小学校共通歌唱教材の伴奏法については、今後どのように取り組むか、引き続き模索していく必要があると考えている。

### 4-3 音楽教材の作成

曲を仕上げることで精いっぱいになるのではなく、弾き歌いできるようになった歌を、どのように現場で活かすのかについての学習こそ大切にしたい。来年度は、「幼稚園実習」「初等音楽科指導法」「合唱」「リトミック」の各担当教員と連携し、弾き歌いの歌を用いた音楽活動が学べる教材作りを、共同で進めていきたいと考えている。

### 4-4 読譜アプリの活用

学生の読譜の負担を減らすことによって、効率的にレパートリーを増やそうとしがちであるが、卒業後の継続的な音楽活動を考えると、平行して読譜やリズム譜のトレーニングも行う必要があるだろう。適切な読譜アプリやウェブサイトなどを利用して、自分でトレーニングする方法を紹介していきたい。

## おわりに

本稿では、昨年度の報告における授業改善のための提案を踏まえ、今年度実施したピアノ指導の内容を報告・評価した。そして、初等教育学科発足3年目となる次年度に向けて、指導の方向性と対応策を明確にすることを試みた。

コード伴奏の指導を基本形コードから始めるか、転回形コードから始めるかについては、初等教育学科初年度より、悩み続けてきた事柄であった。今回の学生へのアンケート結果や実践結果は、「今後の初心者の弾き歌いは、基本形コード伴奏から始める」という決断を後押ししてくれたように感じた。

今後は、初等教育学科の4年間のカリキュラムを見すえ、学生の弾き歌い技能が横断的な学びの中で活かされ深められるよう、引き続き研究を重ねていきたい。

## 引用文献

- 1) 細田淳子, 笹井邦彦, 西海聡子, 悠木昭宏共著 (2011) かんたんメソッド コードで弾き歌い, カワイ出版 p.30
- 2) 同上, p.32

## 参考文献・参考楽譜

- ・木下和彦 (2015) 「子どものうたの弾き歌い指導におけるコード伴奏の有用性－幼稚園教員養成校の教員及び学生を対象とした質問紙調査を通して－」全国大学音楽教育学会『創立30周年記念誌（研究紀要第26号合併号）』
- ・西海聡子, 笹井邦彦, 細田淳子共著 (2017) 「保育者養成における弾き歌いのためのコード伴奏法」『東京家政大学研究紀要第57集(1)』
- ・川口潤子 (2016) 「初等教育学科「音楽」におけるピアノ指導の現状と課題」『白百合女子大学初等教育学科紀要第1号』
- ・細田淳子, 笹井邦彦, 西海聡子, 悠木昭宏共著 (2011) かんたんメソッド コードで弾き歌い, カワイ出版
- ・伊藤伸明編著 (2016) 3つのコードで楽しく弾けるピアノ伴奏曲集, ドレミ出版
- ・内閣府 (2017) 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本
- ・宮崎新悟, 志民一成共著 (2017) 平成29年版 小学校新学習指導要領の展開 音楽編, 明治図書出版

## 英文要旨

This on-going study is to re-evaluate my group piano instruction method for college students of child education major. This year, the new projects, (1) a pre-enrollment self-learning system and (2) a special class for students with piano experiences, were implemented. To prompt their further self-learning in class, “Ten-Times-Repetition Together of Self-Chosen Contents” and “Singing / Accompaniment Self-Evaluation Form,” were also introduced. A drastic change of piano accompaniment method to “Root-Positioned ONLY” (without “F & G inversions” customarily practiced at school), was adopted and discussed. “Tri-colored Cards” informing students’ piano skills to enhance their “peer-learning” have been utilized continuously. Development of workbooks for realistic child education and use of software to read music appeared as issues for future.